

世相を斬る！ 玄 秀盛

命を救うハガキ

「私どもは善処しております」

今年の初め、中学生が山形新幹線に飛び込んで亡くなった。学校は、いじめのことを知らなかった。でも、生徒たちは百人が知っていた。

どんなに電話やメールやツイッターがあったとしても、それだけでは命は救えない。いかにして子どもたちに日常から近づいているか。彼らのすぐ近くに、何のしがらみもなく率直に言える誰かがいるかどうか。それが社会のインフラになっているかどうか。多種多様な方法が可能な時代、いろんな命のサポートがあってもええと思う。

そう思って、「いじめはがき」を考えた。ハガキを使って「駆け込み寺」に教えてくれれば、その子が通う学校、市区町村の教育委員会、児童相談所、子供センター、さまざまな行政機関などと連携して、未然に防ぐことができる。

難しことじゃない。「駆け込み寺」の宛名が印刷されたハガキをコンビニやゲームセンター、カラオケ店、学習塾、学童保育所、公共施設に置いてもらって、いじめ相談の詳細を書いて、ポストにそのまま投函すれば届く、というシンプルなシステム。自分の名前を書かなくてもええ。別人のふりをして「〇年〇組で、いじめが行われているようです」だけでええ。プライバシー・シールも貼れるようにする。年中無休、相談無料の「駆け込み寺」を使ってもらえば、土日・祭日でも救える命があるんじゃないか。そのお手伝いをしようと思ったわけや。

そこで、これをまず、ある町の教育委員会に提案してみた。

すると、「いま、私どもは、同様のいじめ防止対策をやっております。電話でも、メールでも受け付けております。こんな体制で取り組んでおります。こういう点に注意して未然に防ぐ対応をしております。最近では、『学校問題対策センター』も設けております」と、想定内の答え。なるほど、屋上屋を重ねることで安心するんじゃない。でも、現実問題として、いじめられてる子どもは、電話も、メールも、怖くてできへんねん。まして、行政という敷居が子どもにはしんどい。だから、サービスとしての行政対応ではなく、ミッションとして行う民間の活動のほうが近づきやすい面があるねん。

しかも、このハガキがいろんなところで大人の目に触れることも大事なこと。社会全体に関心と監視の目を持ってもらうなかで、いまのような、子ども本人だけが抱え込んでいる状況を変えていける。「受け付けています」という冷たい仕組みではないねん。いじめはボーダーレス。地域区分無用、正体不明のネットでやられる。そんな現実に対応するためには、市区町村の一步外へ出ても社会全体に「ハガキ」があるということが最大のメリット。どこからでも出せる。どこで働いている大人も気にしてくれる。公立学校に通う子ども、私立学校に通う子ども、越境通学の子ども、区別しないで済む。

「駆け込み寺」代表の俺が責任を持ってやることを利用してもらえば、子どもたちの命が救えますと説明しても、「私どもは組織的な体制と長い蓄積で、ノウハウが……」と、これまた誰に対しても使えるお答え。要は、官は民とは一緒にやらない、ということ。官が言う「組織として」は、一般用語で言えば、誰も責任を引き受けないということ。

「私どもには、他の教育機関、福祉機関、警察などとの連携があります」「子どもたちのプライバシーには最大の注意を払わなければなりません」とも言われた。

翻訳すると、「官のシステムに乗らない限り、民は動けません。私たちにはそういう資格があるんです」となる。

なるほど。その地域で問題が起こらないと、変わる気配はないなあ。いや、問題が起きても、この構造は変わらんのやろなあ。

「玄さんは玄さんで、おやりになったらいいのですよ」という言葉は、「自分たちの牙城に入ってくるな」と解釈した。既得権益、縦割り、という“独自性”を壊さないでくださいよ、という心底の願いまで聞こえてきた。

進取の精神が少しでもあったら聞く耳もあるはずや、ちょっとお手伝いできることもあるんやないか、そう思っ行って見たけれど、姿勢としては「余計なこと、せんといてえなあ」という印象。「提案」ではなく「苦情」と受け取ったんかな。だから三人も出てきたんかな。

「私どもは善処しております。玄さんは、子どもの命を救えますか？」と言われたときには、啞然とした。十二年間で三万人の命を救ってきた実績を話したものの、すべてに志と使命を持ってやっている真意がどれほど伝わったやろか。

命を護るという大義

社会の問題に対処することと、組織内の役割を果たすことは違う。前者は社会を護ろうとする意味で、後者は組織を護ること。あるいは前者は現場レベル

で考えること、後者は組織レベルで考えること。現実に対応するのか、組織でできる範囲の仕事をするのか、の違い。

もっと言えば、組織論を振りかざすのは、自分にプライドがなく、組織にだけプライドがあるから。自分にプライドがあれば責任を取ることができる。二、三年で、部署移動という「席替え」があればなおのこと、無責任組織論でやっていくしかない。これはもう社会情勢に合わせた「進化」などできへん。硬直化、ガラパゴス化がよく分かる。

分かるんやけれど、それをちょっと変えられんへんかなあ。それだけで救える命があるはずなんやけれどなあ。それが俺の率直な気持ち。俺の行った町の教育委員会だけが特別だったのかも分からん。もしかしたら、義務・命令・指示・無責任の体質で「時刻表」のようにしか動かない部署に、俺がたまたま行っただけかも知らん。

ただ、逆に考えれば、「組織的な体制」という言い方は、コロコロと「席替え」をしても、誰が担当になっても、体制が整っているということやから、これは「いつでも、どんな問題にも対応できます」という意味にも受け取れる。組織として護る仕事と、一人の命を救う仕事では、意味が違うけれど、「組織として子どもの命を護っているんです」という力強い言葉を聞いたことは、とても大きな収穫やった。民の下請けにならず、官には組織力がある、その自信に、「さすが！」と感服した。

行政サービスという仕組みに対して、クレーマーになってはアカン。いろいろな部署に「回して」くださるんやから、いろいろな部署の方々と話ができるというのは、ありがたい。この勤勉実直さが日本人の気質。前例を出ないことも、「関係部署との調整を図りながら」も、統制されている点では素晴らしい。賄賂が横行するような行政では社会は崩壊するからな。しかし、独創性や進取の精神は残念ながら乏しくなる。

そういうことが分かったうえで、あえて疑問を呈するならば、個人の提案内容が体よく断られたとしたとき、もしその同じ内容が首長あるいはどこかの大きな組織の長から提案されたなら、これも体よく断られるやろか？おそらく、それはない。ということは、内容が問題なのではなく、誰が提案したかが判断基準ということ。そこは、日本社会における行政組織の宿題として考えなければならぬことやないかと俺は思う。なぜなら、国民、住民の命を護るという大義が後回しにされてしまうことになるからや。黒澤明の映画『生きる』では、住民が望んだ公園が遺された。

「命のポスト」が立っている

日本の郵便制度は、世界的に見ても素晴らしい。わずか五十円（四月から五十二円）で小さな島にも届けてくれる。メールとは趣の違うメッセージになるハガキと手紙はええもんや。

カナダでは、公的な郵便制度が半ば崩れかかって、郵便物集荷所まで地域住民が受け取りに行くようになった。悪天候のときや高齢者や体の不自由な人にとっては負担。その意味で日本郵便は誇り高いものや。

しかし、いつカナダのようになるか分かん。郵便事業も、まだまだ社会貢献できる領域はあるはず。その提案でもあったんや、「いじめハガキ」は。

つまり、ポストの有用性を国民に見直してもらいたい、なくてはならないものとして国づくりに生かしたい、そういう気持ちがある。ポストを見るたびに、「私はこれに命を救われた」「私の子どもはこれに助けられた」「お母さんはこのポストに助けられたのよ」と思う人がいるだけで、百四十数年の郵便制度の意味が深まる。

全国には数万のポストがある。風景となって溶け込んでいるから気付かへんけれど、しっかりと見直したらええ。命の「赤」に俺は見える。そこに立っているのは「命のポスト」やねん。

たった一人の命を救う使命、そして、世界のどこもやっていない「命のポスト」、そこに進取の精神が生まれてくる。